子どもを取り巻く状況を理解する

外国にルーツをもつ子どもの背景は、実に多様です。同じ年齢、同じ国から来た子どもでも、来日した時期、家庭内で使っている言語、育ってきた環境、学習経験などは、一人ひとり異なっています。

例えば、目の前にフィリピンから転入した10歳の児童が3人いるとします。Aさんは、フィリピン国籍の母親が日本人の夫と再婚したことに伴い、このたびフィリピンから呼び寄せられました。Bさんは、Aさん同様母親の再婚により半年前に来日、今までは別の小学校に通っていて、引っ越しにより転校してきました。Cさんは、日本人の父親とフィリピン人の母親の間に生まれた日本国籍の児童で、5歳までは日本で育てられ、その後事情があって5年間母親のフィリピンの実家に預けられていましたが、このたび帰国してきました。

このような個別の背景を多面的に捉えることにより、子どもへの理解が深まり、つまづきの原因を読み解いたり、興味・関心を高める日本語指導の工夫をしたりできるようになり、一人ひとりに寄り添った指導・支援を考えることができます。

また、日本の外国人受入制度や、ルーツのある国の事情など、該当の子どもが今ここにいる制度的・社会的背景について知っておくことも大切です。

「生活言語」と「学習言語」

外国にルーツをもつ子どもが日常生活の中で流暢に日本語を使っているのを見ると、もう大丈夫と思うかもしれません。しかし、教科の知識や概念を表すことばには、日常生活ではあまり使わないことばがあります。例えば、学習活動の中では「この人の気持ちは…」ではなく「登場人物の心情は…」のように同じような意味でも日常生活では耳慣れない表現がたくさん使われています。「しかく」は分かっても「正方形」「長方形」は分からない、「はな」「くさ」が「植物」に結びつかないという子どもも多くいます。

日常生活で使う「生活言語」は比較的短期間でも身につくとされていますが、授業や抽象的な学習のための「学習言語」を理解して運用できるようになるには、長期間、体系的な学習が必要とされています。